



А. М. Бородин, 1812-1882 гг. Портрет А. М. Бородина, 1860-е гг.



## カオス 「混沌に向かって」

[A. O. バウマン撮影、1862-63]

今回紹介する肖像写真はA. O. バウマンにより、1862年の秋から翌年の秋頃までにペテルスブルクで撮影されたとされています。前回のM.B.トゥリーノフによる1861年の肖像写真、更にはこれを基にした小出次雄先生の肖像画と較べると、今回は彼の視線も姿勢も随分と前向きなものが感じられます。但し「前向き」という言葉を用いたのは、やや複雑な意味を込めてのことです。前回の肖像画の視線と立ち姿からは、十年間のシベリア体験とそこで与えられたイエス像を背負い、新たに人間と世界に向き合おうとする四十歳のドストエフスキイの精神、闇から遥か遠くの光を臨もうとの姿勢が滲み出ていました。敢えて言えば、それは内面的で謙抑な「前向き」の姿勢であったと言えるでしょう。それに対して今回の写真が表わすものとは、人間的な情熱と意欲が前面に強く出た視線と姿勢であり、ここにはいよいよドストエフスキイが再び人間と世界の混沌に飛び込み、そこで新たな戦いを始めたことからくる「前向き」で挑戦的な姿勢さえ感じられます。

彼は何と戦っていたのでしょうか？

まずはロシアの現実との戦いです。シベリアからの帰還後彼が直面したのは、アレクサンドル二世が進めつつある上からの改革と、その波に揉まれるロシア社会の混沌でした。農奴解放が宣言されたものの、その実質は真の解放とは遠く、様々な革命運動の波が渦巻き、ペテルスブルクの街は大火に焼かれ、ロシアの支配下にあったポーランドでは解放運動が激化し、彼自身も兄のミハイルと始めた雑誌『時代』で『虐げられし人々』や『死の

家の記録』などの傑作を次々と発表し、「土地主義」を宣言したものの、皇帝と民衆との間で自らの文学的立ち位置をどこに定めるべきか、模索を重ねていたのです。

次に西欧世界との対決です。1862年の夏、齢四十を越えて初めてドストエフスキイは西欧への旅をします。その報告記が翌年発表される『夏象冬記』ですが、ここで圧倒的な迫力で我々の息を呑ませるのはロンドンについての報告です。ヴィクトリア女王の下、合理主義と功利主義精神を基に猛烈に産業革命を進める大英帝国の首都ロンドン。ここで彼が目撃したものは、人間疎外化現象が極限にまで推し進められた、露骨な弱肉強食の混沌たる現実でした。一方彼がナポレオン三世治下のパリに見出したのは、あのフランス革命を成し遂げた市民が、今や「自由・平等・友愛」の理想を失い、その精神を「縮こまらせ」、プチ・ブル化してゆく現実でした。ドストエフスキイは前者を「バアル神」、後者を「マモン神」が支配する社会だと断言します。前者は生命の放縦な逸楽、後者は金を象徴する異教神であり、彼は西欧世界がこれらの支配下にあるとし、「何世紀にもわたる精神的抵抗と否定」の必要と必然を自覚して帰国します。アレクサンドル二世とヴィクトリア女王、そしてナポレオン三世という皇帝たちの支配と、バアル神とマモン神の支配。ドストエフスキイが見据える世界の構図と、戦いの対象がここに明確となったのです。

戦いの相手は彼自身の内からも噴き出してきました。シベリアでの熱烈な恋愛の末に妻となったマリア。重度の結核に犯されていた彼女の胸は、ペテルスブルクの寒湿な気候で更に悪化し、最早彼女を待つのは死のみという中で[1864年に死去]、ドストエフスキイを捕らえたのは、二十歳ほど年下のアポリナーリア・スースロワへの情熱でした。1863年の夏、彼はこの若い女性と西欧への旅をするのですが、前年の『夏象冬記』の旅とは違い、既に若い医学生を恋していたスースロワとの旅は、それぞれの情熱に翻弄された苦しみに満ちた旅となります。加えて前年の旅からドストエフスキイは、狂気の沙汰と言う他ない賭博熱に捕らえられ、更に持病の癲癇発作にも止むことなく襲われ続けるのです。

見事な作品論の前に、激しく人生を生きた一人の人間ドストエフスキイの評伝と取り組んだのは小林秀雄ですが（『ドストエフスキイの生活』1939）、彼が捉えたドストエフスキイとは「経験から選擇せずたゞ深くこれに傷つくことが出来た人」、「運命から割引する事を知らず、たゞこれに愛着することが出来た人」であり、小林は「彼の作品の驚くべき秩序が現れる爲には、彼の支離滅裂な生活は必須のものであった」と結論づけます。

臆病さと怠惰さによって小さく狭いものに限定されてしまう我々の生活と人生。それらが本来は戦うべき「混沌」としてあることを、今回の肖像写真とその背後にあるドストエフスキイの生活と人生、そして作品は教えてくれるはずです。